

今治歴史散歩

大成 経 凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第十二回は、今治城本丸跡に建つ時報塔と行啓記念碑の由来を紹介し、大正・昭和の今治を歴史散歩したいと思います。

第十三回 時報塔と行啓記念碑

●開市記念時報塔

大正九（一九二〇）年二月十一日の今治市市制施行を記念して、今治城本丸跡西隅櫓台にハイカラな時報塔が設置された。寄贈者は、今治出身の建築家・吉田猪之助という。この時報塔にはモーターが付属し、サイレンで正午などの時間を市民に知らせた。高さはモーターを含めると約四メートルあり、基台の表面はモルタル塗りで洋風の意匠をあしらっている（太平洋戦争中は空襲警報にもなり、昭和三十年代に廃止となる）。

当時、今治市は“四国のマンチェスター”とも称され、市街には黒煙をあげる綿織物工場が多く立ち

並んでいた。この光景を眺めるビューポイントが吹揚公園で、しだいに今治市第一の公園として認識されるようになる。すでに公園内には矢野七三郎像明治四十四年竣工）が建ち、この花崗岩製基台にも洋風の意匠があらわれ、シンボルタワーとして存在感を放っていた。



時報塔と行啓記念碑

●皇太子殿下の今治行啓

大正十一（一九二二）年十一月中旬、皇太子殿下ご統監のもと、香川県などで四国初の陸軍特別大演習が挙行された。これを終えると、殿下は南海道の民情視察で、愛媛・高知・徳島・和歌山県の順に海路から主要都市を行啓している。愛媛の訪問先は今治・松山・宇和島の三都市であった（同九年十一月十七日に、殿下は大三島の国幣大社・大山祇神社をご参拝している）。

二十二日午前七時に高松港を発った御召艦・矢矧は、十時半頃に今治港外へ投錨。すると、時報塔のサイレンをはじめとし、市内の工場や碇泊中の汽船が一斉に汽笛を鳴らし、築港突堤からは奉迎の煙火が打ち上げられた。その年、今治港は四国初の開港場となっていたが、築港整備は未完成の状態にあり、殿下は汽艇に乗り換えて吉忠海岸（片原町）へ着岸している。

港で市民の盛大な歓迎を受けた後、殿下は県立今治中学校（現、今治西高校）で昼食をとり、阿部光之助ら東予地区の教育・産業振興の功労者六名とご面会。児童・生徒の運動会（体操・ダンス）も台覧している。最後は吹揚公園を遊覧して、午後二時には次の目的地・松山へ向けて出港した。この日、今治市内で殿下を出迎えた拝観者は二〇万人ともいわれる（以上、海南新聞参照）。

七年後の昭和四（一九二九）年十一月二十二日、時報塔のそばに高さ三m余りの記念碑「皇太子殿下



矢野七三郎像（昭和初年の絵葉書より）



吹揚公園から見る今治市街（昭和初年の絵葉書より）

「御立之所」が建立された。当時の今治名所絵葉書にも、時報塔とともにこの碑が写っている。殿下はここに設けられた特設の展望所から、「四国のマンチエスター」を眺めたようである。

●特産品の御買上げ

企業にとっては、皇族の工場ご視察を受けることは大変名誉なことであった。今治行啓の際、工場視察は行われなかったが、殿下は今治有数の綿織物会社である興業舎と阿部会社へ使者を派遣している。

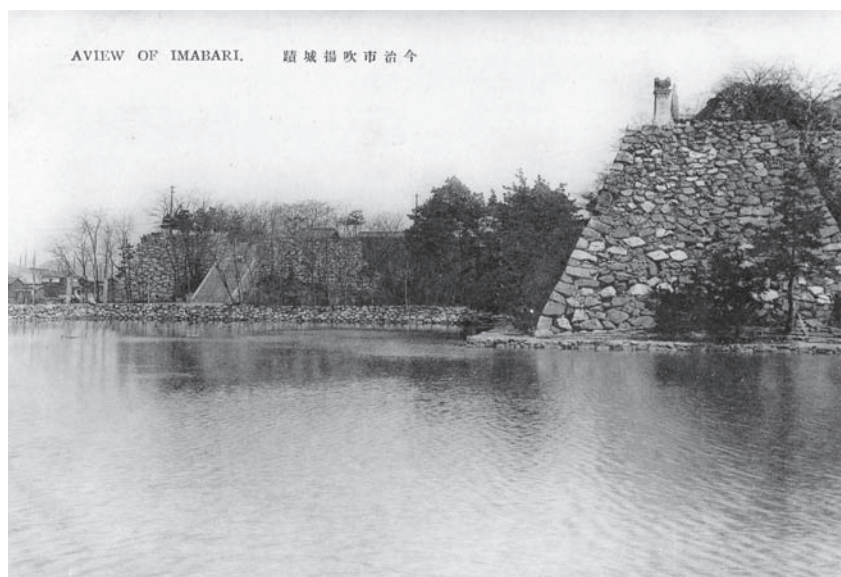
また、県内では自社の商品を御買上げ頂いた個人・企業も多く、その喜びを新聞の広告記事に載せるものもあった。今治市では、丸今綿布・麓商店・矢野綿練工場ら9社の綿織物会社が、白木綿・綿ネル・タオルなどの御買上げ栄誉を受けた。

越智郡では桜井町の笠原卯三郎（漆器）と弓削村の白川新松（皮剥鰻）が御買上げの栄誉を受け、卯三郎はこれを記念して「いよ桜井名所絵葉書」を発行している。

●昭和天皇としての今治行幸

殿下はその数年後、昭和天皇となられ、昭和二十五（一九五〇）年三月十八日に再び今治市ご訪問をされている。敗戦からの復興を目指す市民には、大きな励ましとなった。この時は、西条発のお召列車で今治駅へ降り立ち、港務所・阿部会社・美須賀小学校・楠橋紋織工場（乃万村）の順に巡幸された。また、これに前後して、桜井駅前や菊間駅前の奉迎場でも、両町民からの盛大な歓迎を受けている。

三度目は、昭和四十一（一九六六）年四月二十日



今治城本丸跡石垣と時報塔（昭和初年の絵葉書より）

のことで、皇后陛下を伴っての今治ご訪問となった。両陛下は、十八日に温泉郡久谷村（現、松山市）で開催された第十七回全国植樹祭にご出席され、十九日は萬翠荘で県獣ニッポンカワウソのはく製を、植物研究家・八木繁一（波方町出身）の説明を受けながらご見学されている。今治にはお召列車でご到着され、タオル会社の田中産業拝志工場をご視察された。同社の社屋は、これに合わせて新築したものという。